

5月2日 復活節第5主日

使 14:21～27 黙 21:1～5a ヨハ 13:31～35

1. ヨハ

v.34 「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

この「新しい」という表現の重要性に、先ず注意を喚起したいと思います。互いに愛し合うという同胞愛そのものは、決して新しいものでもなく(レビ 19:18 参照)、またキリスト教だけの特性というものでもありません。それはイエス・キリストの死と復活によって実現した贖いと、その御子の再臨との間の、中間の時という特別な状況における掟として「新しい」のです。つまり「御国を受け継ぐ」(エフェ 1:14)という約束を共有しているからこそ、“揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、福音の希望から離れない”(コロ 1:23)ように、互いに“日々励まし合う”(ヘブ 3:13)愛であればこそ、これは「新しい」のです。

v.33a の「いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる」は、元来はイエスの受難前夜を指して言われているのですが、朗読配分ではこの節の後半が省略されているために、意味が曖昧になっています。それは深い司牧的配慮による省略と推測されますが、それで聖書そのものからこの後半部分が削除されたわけではありません。イエス・キリストは罪と死に勝利して、復活されました。しかし教会は今はまだ、“神の国で顔と顔を合わせて”(I コリ 13:12)イエスを見るに至っていません。ただ歴史の教会は、「このような希望によって救われているのです。」(ロマ 8:24) そのような中間の時のための「新しい掟」が、「互いに愛し合いなさい」であることを、よく理解しましょう。

2. 使

v.22 「“わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない” と言って、信仰に踏みとどまるように励ました。」

キリストのため、福音のためという前提が抜け落ちた、ただの人本主義的な“犠牲の精神”を称賛するような論調が、どれほどキリスト者たちの正しい福音理解を妨げてきたことかと、嘆かざるを得ません。「生ける神に立ち帰るように」(使 14:15)、「この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる」(使 10:43)という福音を宣教し、共にその信仰に踏みとどまるために、“多くの苦しみを経る”ことがここでは語られているのです。

カトリック教会はその形成期の数々の困難な闘いを通して、聖伝と聖書を守ったのでした。そしてそれ以来今日まで、それは「聖なる、普遍的、使徒的、唯一の教会」(ニケア・コンスタンチノーブル信条)であり続けて来ました。過去にも現在においても、信者たちが聖伝と聖書から福音を正しく聞き取ることが、実際にどれほど少なかったとしても、それでもカトリック教会はいつも、カトリック教会自身の改革の手段を、確

かに所有していたのです。

2002年に翻訳出版された“カトリック教会のカテキズム”も、今年出版されたその“要約”も、教導職と信徒が共に“聖伝と聖書”に立ち帰るための大いなる援助を提供しようとしています。すべてのキリスト者が、“御国を受け継ぐという約束を共有していればこそ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、福音の希望から離れない”ために、“多くの苦しみを経る”ことを、主は求めておられます。v.22を、ただの昔話の中の一節だなどと思ってはなりません。今朝ここで、キリストの御声を聞き分ける(ヨハ10:2)人は幸いです。

3. 黙

見者ヨハネが、「見よ、わたしは万物を新しくする」(v.5)という玉座に座っておられる方の声を聞いたとき、そこで見たのは「新しい天と新しい地」でした(v.1)。

確かに教会はすでに「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」(IIコリ5:17)時代を歩んでいます。しかし、それと「新しい天と新しい地」を混同してはなりません。歴史の教会は、今なお神の国に向かって旅しており、「地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを」(ヘブ11:13)知っています。「わたしたちの本国は天にあり」(フィリ3:20)、「あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう」(コロ3:4)という希望に生きています。私たちがミサで聖体を拝領するとき、確かに私たちは「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を受け、わたしはその人を終わりの日に復活させる」(ヨハ6:54)というイエスの言葉を信じているのです。

そのような旅する歴史の教会に、その約束と希望のゆえに、「互いに愛し合いなさい」という「新しい掟」が与えられていることを、感謝しようではありませんか。「わたしたちは揺り動かされることのない御国(の約束)を受けているのですから。」(ヘブ12:28)

ハレルヤ、アーメン。

5月9日 復活節第6主日

使 15:1-2, 22-29 黙 21:10-14, 22-23 ヨハ 14:23~29

1. ヨハ

v.23 「イエスはこう答えて言われた。“わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。”」

「わたしの言葉」とは、神がキリストによって世を御自分と和解させてくださった福音のことなので、単数形(λόγος)が用いられています。それは「十字架の言葉」(Iコリ1:18)、「和解の言葉」(IIコリ5:19)と称されるものであって、歴史上の出来事として私たちの間に起こった事柄です(ヨハ1:14参照)。ですから、教会が宣教している“出来事としての言葉(λόγος)”は、哲学やイエスの教え、あるいはキリスト教思想というようなものではありません。

イエスは、十字架につけられて死に、葬られ、さらに復活して天に昇り、地上から去って行かれました。初代教会の人々は最初、このイエスがすぐにも再臨されるという期待を抱いていましたが、実際には教会はそれとは違う歴史をたどることになります。キリストは“弁護者である聖霊”(v.26)を通して、信じる人々と共に住むために戻って来られました(14:18)。教会が宣教する“勝利の言葉(λόγος)”として、私たちの間に来てくださったのです。この事実をヨハネ黙示録は、“神の言葉と呼ばれる白馬の騎手”の象徴を用いて描いています(6:2, 19:13)。

しかしそれは、この“出来事としての言葉(λόγος)”を信じる人々、すなわち教会だけに与えられる賜物であって、外の世界の人々には理解出来ません(14:19,24)。これは、「すべての人の目が彼を仰ぎ見る」(黙1:7)再臨の日とは、明確に区別されているのです。

啓蒙主義以来のキリスト教は、聖書の中心的使信であるキリストの再臨への期待を、合理的に理解不能なこととして退け、同時に“わたしの言葉(λόγος)”としてのキリストが、教会と共に住んでくださっているという信仰を捨てて、それをイエスの教えやキリスト教思想などというものに置き換えようとしてきました。今日“聖書を学ぶ”とは、私たちがそれらの思想との戦いを決意することでなければなりません。「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、(悪魔の)支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。」(エフェ6:12)

2. 黙

vv.10-11 「天使が……、聖なる都エルサレムが神のもとを離れて、天から下って来るのを見せた。都は神の栄光に輝いていた。」

典礼憲章(8)が述べているように、「地上の典礼において、われわれは天上の典礼を前もって味わい、これに参加している」のですから、この都を待望する信仰(ヘブ11:10,16)を、一人一人の信者がしっかりと受

け継ぐことを学ばなければなりません。「昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。」(ヘブ 11:2) そうであれば、現代のキリスト者の場合は尚更ではありませんか。

私たちが共にささげるミサは、「キリスト信者が……、神のことばによって教えられ、主の体の食卓において養われ……」(典礼憲章 48)る「キリスト者の生活全体の中心」(ミサ典礼書の総則 1)であって、ここでは信仰によってだけ、“わたしの言葉(λόγος)”として共に住んでくださるキリストを見る事が出来ます。しかしその日には、もはや「都の中に神殿を見なかった」(v.22)ということが実現するでしょう。この「新しい天と新しい地」(黙 21:1)への期待こそが、現在の私たちの“カトリックの信仰”を支えているのだということを、よく理解しましょう。「わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」(ロマ 8:25)

3. 使

教会の中でも外でも、私たちはキリスト教について、多くの異見や考え方に出会います。「無学な人や心の定まらない人」(II ペト 3:16)は、ただ迷うだけで、「決して真理の認識に達することが出来ません。」(II テモ 3:7) しかし、確かにカトリック教会には、“わたしの言葉(λόγος)”としてキリストが共に住んでくださっているのです。

「聖霊とわたしたちは……」(v.28)と、そう語る事の出来る人だけが、本当に「十字架の言葉」(I コリ 1:18)、「和解の言葉」(II コリ 5:19)への道案内を、信者に与えてくれます。私たちは“弁護者である聖霊”を信じる信仰によって、自ら熱心に、聖伝と聖書に耳を傾けようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

5月16日 主の昇天

使 1:1~11 ヘブ 9:24-28, 10:19-23 ルカ 24:46~53

1. ルカ

v.46-48 「……言われた。“次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。”」

私たちは聖書を学ぶとき、次のことを確認する必要があります。すなわちここでは、旧約聖書の証言と、その誕生から死と復活そして昇天に至るイエスの生涯の出来事、そして使徒および原始教会の宣教を、将来のキリストの再臨への待望と共に、一本の救済史の線上で理解しているということです。新約聖書の証言を、時間および歴史を度外視して解釈しようとするなら、それはもはやキリスト教信仰ではありません。この歴史は、新約の啓示から除去しうる一つの神話ではない(O.Cullmann)のです。

そのような救済史の特定の時に、主の昇天は位置づけられています。それは教会の宣教の時、そしてキリストが神の右の座について教会を治められる(ヘブ 3:6)時の開始であります。この“時”の中に、歴史の教会は「生き、動き、存在する」(使 17:28)のです。

2. ヘブ

v.26 「ところが実際は、世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。」

v.28 「キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。」

キリストがただ一度(εφάπαξ, ἄπαξ)、永遠の贖いを成し遂げられたとは、すべての人間およびすべての時代の救いにとって、決定的に“ただ一度”、“一回限り”という意味です。そして、その時と二度目の来臨との中間の時を歩む教会のために、キリストは今は「もろもろの天よりも高くされている大祭司」(7:26)として支配しておられます。

このように、教会の現在の歩みと、私たちの現在の信仰は、“天に昇って、全能の父である神の右の座に着き”(使徒信条)、大祭司として支配されるキリスト(v.21)と固く結びついているのであって、それを前提にして初めて、教会の「公に言い表した希望」(v.23)を理解し、待望することが出来ます(エフェ 1:18、コロ 1:5,23)。キリストの復活と昇天は、救済史の中の“ただ一度”の出来事であって、一般の歴史の中での他の出来事とは異なり決して繰り返し得ない、決定的な、“中間の時”の出発点だからです。

「だから、わたしたちは聞いたこと(使徒たちの伝えた福音)にいっそう注意を払わねばなりません。そうでないと、押し流されてしまいます。」(2:1) そして、その聞いた福音は私たちの信仰と結びつかなければ

なりません(4:2)。「わたしたちは、最初の確信を最後までしっかりと持ち続けるなら、(神の国で)キリストに連なる者となるのです。」(3:14)

3. 使

v.8 「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

この「あなたがた」とは、言うまでもなく使徒たちのことです。使徒たちの宣教には聖霊が共に働いてくださるということが、近代の教会で久しく忘れられて来ました。今なお多くの司祭と信徒が、使徒たちの宣教に耳を傾けることを知りません。天を見上げて立っていたガリラヤ人のように、聖書をただの昔話のように考えて過去に憧れてみたり、あるいはそこから現代人に役立つなにかのヒントを拾い出すことの出来る教養書として、時折読んでいただけです。

今日私たちは、聖伝と聖書によって使徒たちの宣教に親しむことが出来ます。そして、私たちが使徒たちの伝える福音をそこで聞き取ることが出来るかどうかの鍵は、大いに自らの信仰の姿勢に関係しています。私たちが聖霊を呼び寄せるなどと考えるではありません。使徒たちの宣教と共に今も実際に聖霊が働いておられるだろうかと疑う必要もありません。最も心配しなければならない、しかも私たちに可能な唯一のことは、「聖霊に言い逆らう」(マタ 12:32)ことなのです。“言い逆らう”とは、上記のような見当外れな聖書の読み方のことでもあります。

カトリック教会は使徒継承によって、“使徒たちの宣教”を今日まで受け継いで来ました。それが聖伝と聖書です。私たちがこれを理解して自らの信仰と結びつけ、“約束されたものを手に入れる”(ヘブ 11:13, 39)ために、「神の家を支配する偉大な祭司がおられる」(ヘブ 10:21)、そして聖霊が訪れてくださる(ヨハ 14:26, 15:26)ことを、感謝しようではありませんか。使徒たちだけが、今も福音の確かな証人なのですから。

ハレルヤ、アーメン。

5月23日 聖霊降臨の主日

使 1:1~11 ロマ 8:8~17 ヨハ 14:15-16,23-26

1. ロマ

v.11 「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。」

どうしてキリスト者は、そのようなことを理解出来るのでしょうか。それはキリストが死者の中から復活されたから、そして聖霊を通して聖書を説明してくださるからです(ルカ 24:32)。一・聖・公・使徒継承の教会にとって、聖伝と聖書の解釈者は復活のキリストであって、この方を抜きにしては、それは覆いが掛けられたままの不可解な伝承として留まることとなります(II コリ 3:14-16)。司教や司祭がミサで説教し、会衆がこれを聞くときにも、また私たちが聖伝と聖書を自ら読み、自ら学ぶときにも、“父が復活のキリストの名によってお遣わしになる聖霊”(ヨハ 14:26)の“証し”(ヨハ 15:26)がなければ、それらはただの“書かれた文字”に留まってしまいます(II コリ 3:6)。

キリスト者はだれでも、福音を聞いて信じ、洗礼の秘跡を受けたその日から、聖霊の支配する世界に入りました。洗礼によって新しい命に生きるようになったキリスト者は、「聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。」(エフェ 4:30)

しかしこれは信仰の事柄なので、「鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようであったか、すぐに忘れてしまう」(ヤコ 1:24)ということが起こります。せっかく洗礼を受けていても、使徒たちが伝えた福音に自ら耳を傾けることをせず、道徳や思想や主義などといったものでそれを置き換えてしまうと、そうなります。「自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。」(I コリ 2:14)

2. ヨハ

「わたしの言葉」(v.23)とは、神がキリストによって世を御自分と和解させてくださった福音、すなわち教会が宣教している“出来事としての言葉(λόγος)”のことだと、私たちは先日学びました。このキリストの福音を共有するための教会共同体の一致と団結こそが、v.15の「わたしの掟」の意味であることを理解しましょう。この「わたしの言葉」と切り離して、それとは独立して聖霊の働きを理解するなどということは、使徒たちにとっても、原始教会にとっても、無縁なことでありました。

v.26の“すべてのこと”、“わたしが話したこと”を、“出来事としての言葉(λόγος)”とは別な何かで置き換えてしまうなどということは、使徒たちにとって予想出来ないことであつたに違いありません。しかし歴史の教会は、繰り返しこの過ちを犯して来たので、外見的には“いろいろなキリスト教”“いろいろな教会”

が数限りなく存在することになりました。事実私たちの体験によれば、信仰の初学者がほんの少し真面目に学ぼうとすると、神父や先輩信者の数だけ多くの、いろんなキリスト教理解があって困惑するのです。

しかし、私たちは決して失望する必要はありません。カトリック教会は確かに使徒継承によって、今日に至るまで“聖伝と聖書”を受け継いで来ました。もし洗礼を受けた信者が、この“聖伝と聖書”を自ら学ぼうとするなら、聖霊はすべてのことを教え、“出来事としての言葉(λόγος)”をことごとく理解させてくださいます。ただし、これはマジックではありませんから、一人一人がこつこつと真面目に努力することが必要であることは言うまでもありません。

3. 使

使徒言行録の記述の目的は、聖霊降臨の出来事を“見て来たように”報告することではなくて、むしろ教会にとってのその重要な意味を神学的に説明することでありました。vv.1,4の「一同」も、v.11の「彼ら」も、「使徒たち」(v.6)のことであって、ここで取り上げられている唯一の関心事は“使徒たちが伝えた神の偉大な業”(v.11)であることを、よく理解する必要があります。

どこの国の言葉を話す人たちでも、もし同じ“出来事としてのキリストの言葉(λόγος)”を聞いているのなら、同じ一つの信仰を共有することが出来るということを、私たちは今でも信じて良いのです。政治運動や社会問題への取り組みのための団結ではなくて、「福音の信仰のために共に戦う」(フィリ1:27)共同体に、聖霊は訪れてくださいます。「聖霊の交わり」(κοινωνία του ἁγίου πνεύματος/II コリ13:13、フィリ2:1)とは、そういう意味なのです。

ある特定の、あるいは特別なときだけではなくて、いつも、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが」(II コリ13:13)、共にミサをささげる会衆一同の上にありますように。

ハレルヤ、アーメン。

5月30日 三位一体の主日

箴 8:22～31 ロマ 5:1～5 ヨハ 16:12～15

1. ヨハ

vv.13-14 「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。…… その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。」

イエスの地上の生涯の間、弟子たちが救い主としてのイエスをほとんど理解していなかったことを、福音書は伝えています。イエスの受難と復活の後に初めて、弟子たちは罪と死に勝利された贖い主キリストを理解したのです。復活のイエスの霊が、彼らに福音の真理をことごとく悟らせてくださるのを、彼らは体験しました。歴史のイエスがかつて彼らに話された数々のことが思い起こされ、その意味が分かって来ました(ヨハ 14:26)。

この事実を前提にして、私たちは聖書を学ぶことが大切です。「聖書の預言は、…… 人々(使徒たち)が聖霊に導かれて神からの言葉を語ったものだからです。」(IIペト 1:21) 私たちはこの目で「キリストを見たことがないのに愛し、今は見なくても信じており」(Iペト 1:8)と言われていると同様に、また聖霊を見ることも出来ません(ヨハ 3:8)。しかし、聖霊の働きなしに聖書を理解し、そこから福音を聞き取るということは全く不可能なのです。

ほぼ3世紀半ば頃には組織として確立したカトリック教会が、その後聖伝と聖書を今日に至るまで、使徒継承によって守って来たことの決定的重要性を、私たちは再認識しなければなりません。歴史を通していつも、信者を教導する大多数の司祭が福音を理解することが少なかったにしても、“畑に宝が隠されているのを見つけて、そのまま隠しておいてその畑を買った人のように”(マタ 13:44)、カトリック教会は自らの刷新の手段を今も確かに所有しているのです。

2. ロマ

v.5 「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

この神の愛とは、「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(5:8)ということです。その結果私たちは、「神との間に平和を得ており」(v.1)、「神の(国の)栄光に与る希望を誇りにしています」(v.2)。

このような福音理解は、聖霊の働きなしには不可能なことなのです。「それは愚かなことであり、理解出来ない」(Iコリ 2:14)という当然のことを、正直に認める必要があります。復活のイエスの霊が福音の真理をことごとく悟らせてくださる、という体験なしに、キリスト者の喜びや感謝を語ることは、口先だけの美辞麗句に過ぎなくなります。

聖霊が働く場所は教会です。聖伝と聖書を受け継いで来たのは教会であって、実際には個々の司祭が説

教で福音を語ることが稀であるとしても、信者は「主の霊のおられるところ」(II コリ3:16-18)である教会を離れては、福音の光を見ることは出来ません。私たちキリスト者にとって“聖書を学ぶ”ことは、霊であるキリストの方を向くことによって、実り豊かなものになるのです(II コリ3:16)。

信者一人一人が聖霊の導きを大切にして、ミサを生きる生活の中で“自ら”聖書を“こつこつと”学ぶことにより、「それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです」(ロマ5:9)と、感謝するに至ることが出来ますように。

3. 箴

この知恵の賛美を、新約聖書の コロ 1:15-18 と照らし合わせて読むとき、私たちはそこで重大な福音の使信に出会います。このような旧約聖書の再解釈によってキリスト教という宗教を成立させた無名の教祖が存在したなどと空想してはなりません。このような解釈はイエス御自身に起源していて、復活と昇天の後に、聖霊が使徒たちにそのことを教え、思い起こさせてくださったのです(ヨハ 14:26 参照)。

「すべてのものが造られる前に生まれた方」、「万物は御子において造られた」と言われている方、神はこの「御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し」てくださったという福音(コロ 1:19-23)を理解させてくださるのは、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり」(II コリ 13:13)であることを、全世界のキリスト者と共に、今朝、私たちは感謝しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。